

中扉には、学習の目標と教材を、自然が見せるさまざまな表情と共に示している。身につけたい力を確かめ、学習を進めていこう。

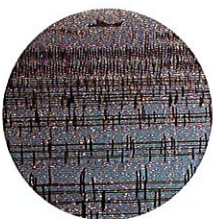
1 深まる学びへ



2 視野を広げて



3 言葉を見つめる



4 状況の中で



5 いにしえの心と語らう



6 論旨を捉えて



7 未来へ向かって

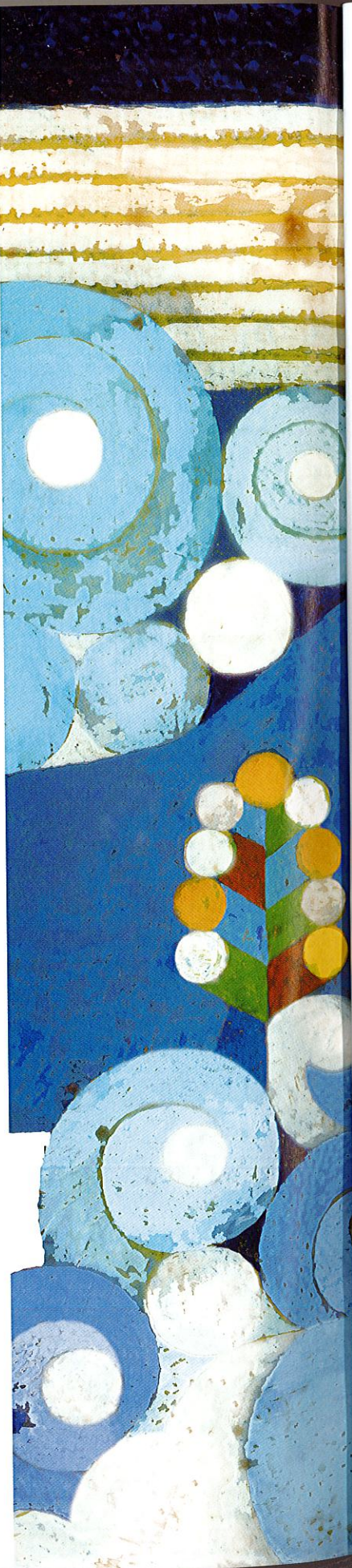


文法／漢字に親しもう



国語 3

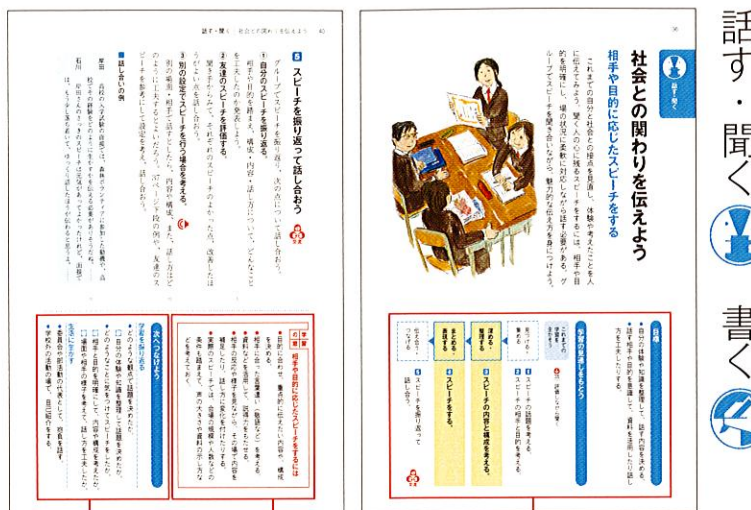
光村図書



この教科書で学習する みなさんへ

主な教材の構成と学習の流れ

話す・聞く 書く



この教科書を使うみなさんが、見通しをもって、主体的に学習に取り組んだり、振り返ったりするときに役立つ教科書の機能を説明している。効果的に学習を進めるために活用しよう。

学習の見通しをもつ

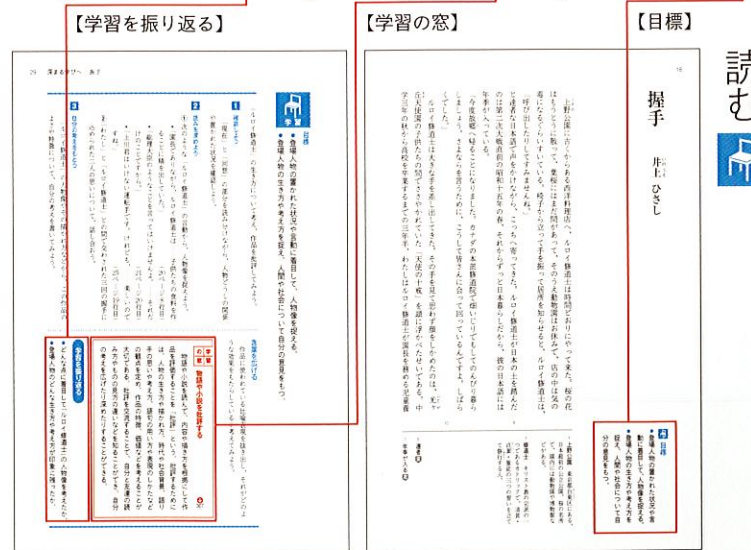
その教材で身につける力や学習の流れを示している。これまでに学習してきたことを生かしながら、見通しをもって学習に取り組んでいこう。

学習・活動に取り組む

学習を通して身につける力のポイントを具体的に示している。基礎・基本を押さえたり、身につける力を確認したりするときに活用しよう。

次の学習に生かす

学習したことを振り返って確認し、次の学習や日常生活に生かしていくためのポイントを示している。活動を通して、どのようなことを学び、身につけたのか、最後にもう一度見直そう。



読む

握手 非礼をせし

効果的な学習のために

全体の見通しをもつ

- ▼ 学習の見通しをもとう (8ページ)
- ▼ 学習のための用語一覧 (306ページ)

教科書全体の学習活動を見通すために、一年間で学習する言葉の力や用語を一覧で示している。身につける力を確認したり、学習計画を立てたり、学習を振り返ったりするときに活用しよう。

「話す・聞く」「書く」の力を磨く

- ▼ 練習 話す・聞く (35・167ページ)
- ▼ 書く (53・123・173ページ)

生活の中のひとこまを例に、「話す・聞く」「書く」の基本的な力をつける学習のページ。他の教材を学ぶときに役立てよう。

読みの基本を確認する

- ▼ 文学的な文章を読むために (307ページ)
 - ▼ 説明的な文章を読むために (309ページ)
- 作品や文章をより深く読み取るために、基本的な用語を確認しよう。

読書の世界を広げる

- ▼ 読書生活を豊かに (79ページ)
- ▼ 読書に親しむ (181ページ)

主な記号

交流 交流

課題について確認し合ったり、感想を述べ合ったりする場。

音声教材

CDなどを利用する学習。

参考にした表現

話すとき、書くときに役立つ表現。

新出漢字・新出音訓

その教材で学習する漢字、漢字の読み方。

注意する語句

その教材に使われている重要な語句。

意味を調べる。短文を作る。

類義語を調べる。対義語を調べる。

関連語句を確認する。

広がる読書 (教材末)

教材と同じ著者・テーマの本の紹介。

関連するページ

関連して学習すると効果的なページを示す。

説明・意見	批評	批評	古典関連	意見	推敲	説明	創作・俳句	編集	編集	書くこと
三年間の歩みを振り返ろう 学びについて語り合う	説得力のある文章を書こう 批評文を書く	練習 観点を立てて分析する	■ 古典の言葉を引用し、メッセージを贈ろう	■ 論理の展開を工夫して書こう	練習 推敲して文章を整える	言葉を選ぼう もっと「伝わる」表現を目ざして	■ 俳句を創作しよう	魅力的な紙面を作ろう 修学旅行記を編集する	練習 文章の形態を選んで書く	教材
210	174	173	154	126	123	71	69	54	53	
										課題の設定・取材 社会生活の中から課題を決める
										取材を繰り返しながら 自分の考えを深める
										構成 文章の形態を選択する
										適切な構成を工夫する
										記述 論理の展開を工夫する
										資料を適切に引用して 説得力のある文章を書く
										推敲 文章を読み返し、 文章全体を整える
										交流 論理の展開のしかた や表現のしかたを評価する
										書いた文章を読み合い、も のの見方や考え方を深める
										学習のポイント ●印は、「学習の窓」で 解説している事柄
ものの見方や考え方を 深める ●	説得力のある批評文を 書く ●	観点を立て、分析的に 物事を見る	古典の言葉を引用して、 メッセージを書く	社説の文章を参考に、 自分の考えをまとめる	主張を明確に伝える	構成や内容を推敲し、 社説の文章を参考に、 自分の考えをまとめる	言葉について調べたこと や考えたことを説明する	魅力的な紙面を編集す る ●	内容や目的に応じて、文 章の形態を選んで書く	表現を工夫して俳句を創 作する

学習の見通しをもとう

- 一年間でどんな学習をし、どんな言葉の力を身につけるか見通そう。
- 学習計画を立てたり、振り返って次の活動に生かしたりするときに活用しよう。

どんな学習をするのか見通してみよう

何度も繰り返して積み重ねながら、言葉の力をつけていこう

説明・発表	話し合い	話し合い	話す・紹介	聞く	話すこと 聞くこと
三年間の歩みを振り返ろう 学びについて語り合う	話し合って提案をまとめよう 課題解決に向けて会議を開く	練習 話し合いを効果的に進める	社会との関わりを伝えよう 相手や目的に応じたスピーチをする	練習 評価しながら聞く	教材
210	168	167	36	35	
					話題の設定・取材 社会生活の中から話題を決める
					自分の経験や知識を整理し て考えをまとめる
					話す 語句や文を効果的に使う
					資料を活用して説得力のある 話をする
					場面や相手の様子に応じて 話し、敬語を適切に使う
					聞く 聞き取った内容や表現の しかたを評価する
					自分の考え方を深めたり表現 に生かしたりする
					話し合う 話し合いの進 行のしかたを工夫する
					課題解決に向けて互いの考 えを生かし合う
ものの見方や考え方を 深める ●	話し合って合意を形成 する ●	論点を整理し、展開を 捉えて話し合う	相手や目的に応じたス ピーチをする ●	発言者の意見を評価し ながら聞く	学習のポイント ●印は、「学習の窓」で 解説している事柄



漢字		言葉				文法			言葉			
小学校六年生で学習した漢字一覧		漢字1 熟語の読み方	漢字2 漢字の造語力	漢字3 漢字のまとめ	言葉2 慣用句・ことわざ・故事成語	「批評」の言葉をためる	言葉1 和語・漢語・外来語	文法2 文法のまとめ	文法1 文法を生かす	一、二年生の復習	教材	
								221 ↓ 文法への扉2 「ない」の違いがわからない？	218 ↓ 文法への扉1 すいかは幾つ必要？			
229	207	129	41	127	73	71	63	180	78	216		
				●	●	●	●				言葉の理解 意味に着目する	
					●	●	●				性質・働きを理解する	
								●	●	●	言葉の決まり 文の成分	
								●			単語の種類	
								●			単語の活用	
								●	●		単語の働き	
	●	●	●								漢字 漢字に関する知識	
	●	●	●								漢字を読む	
●											漢字を書く	

いつも気をつけよう

二年生で学習した主要内容を示している。学習を進めるときや日常の生活の中で意識していこう。

232 三年間の言葉の力を確かめよう



話すとき

- 多様な方法で情報を集め、整理して、伝えたいことを明確にする。
 - 異なる立場や考えを想定して、自分の考えをまとめる。
 - 意見と根拠を明確にし、話の中心と付加的な部分に注意して筋道立てて話す。
 - 資料や機器などを効果的に用いる。
- ### 聞くとき
- 話の要点や順序を整理してメモを取る。
 - 話の構成や展開に注意し、自分の考えとの共通点・相違点を考えながら聞く。
- ### 話し合うとき
- 相手の考えを尊重し、目的に沿って話す。
 - 互いの意見の長所や問題点を整理し、多角的に検討して自分の考えを広げる。



書くとき

- ### 日常
- 心に留まった出来事や情報を書き留める。
 - 課題設定・情報整理
 - 多様な方法で情報を集め、分類・整理して自分の考えをまとめる。
 - 自分の立場や伝えたいことを明確にし、構成を工夫して書く。
 - 事実や心情が効果的に伝わるように具体例を加えたり描写を工夫したりする。
- ### 推敲・交流
- 語句や文の使い方、段落相互の関係に注意して、わかりやすい文章にする。
 - 文章を読み合い、構成や情報の活用のかたを助言し合い、表現に生かす。



文学的な文章を読むとき

- 心情を表す語句に着目して読む。
 - 時間の経過や出来事など、場面の展開に着目して読む。
 - 心情の描き方、人物どうしの関係、言動の意味、人物像の変化に着目して読む。
 - 描写のしかたや比喩の用い方などの表現について、自分の考えをまとめる。
- ### 説明的な文章を読むとき
- 抽象的な概念を表す語句に着目して読む。
 - 文章全体と部分との関係や具体例の効果などに着目して読む。
 - 文章の構成や論の展開のしかたの工夫について、自分の考えをもつ。
 - 書かれているものの見方や考え方について、知識や体験と結び付けて考える。

続けてみよう



「私の評価」メモ

小説や映画、広告、テレビ番組、音楽、料理などから、興味や関心のある事柄を取り上げ、自分なりに評価したり、友達と意見を伝え合ったりしてみよう。

日付
興味のある事柄

○月○日
映画「○○」について(○○映画館)
・ストーリー：★★★★☆
→終わり方が少し味気なかった。
原作のほうが◎。
・キャスト：★★★★★
→全員イメージどおり！
・映像：★★★★★
→迫力があり、見応え十分。
・音楽：★★★★☆
→壮大な感じがよく出ている。
・総合：★★★★☆
原作が好きだったので見る前は不安だったが、想像以上によかった。
映画館で見る価値あり。

自分の評価

興味のある事柄や心に残る言葉に出会ったら、書き留めておこう。次の例を参考に、一年間、自分なりの記録を続け、折に触れて紹介し合おう。

アンソロジー

心に残る詩や文章に出会ったら、一節を選んで書き留めよう。書きためたら、テーマを決めて自分なりの作品集(アンソロジー)を編んでみよう。

日付
言葉
感想

○月○日
「吾十有五にして学に志す。」(論語)
↓私は十五歳のとき、学問に志を立てた。
☆強い決意を感じる言葉だ。僕も十五歳、
今年、特に学問に励もうと思う。

○月○日
「学(は)学ぶほど、自分が何も知らなかったことに
気づく。気づくは気づくほどまた学ばなくなる。」
(アルベルト・アインシュタイン「○○の言葉」)
☆学ぶ↓気づくというサイクルで学びが深まる。
学ぶことについて考えさせられた。



深まる学びへ

表現の豊かさを味わい、生き方を考える

詩

春に

谷川俊太郎

小説

握手

井上ひさし

季節のしおり 春

漢文・解説

学びて時にこれを習ふ——「論語」から

練習 評価しながら聞く

話す
聞く

社会との関わりを伝えよう
相手や目的に応じたスピーチをする

漢字 1 熟語の読み方

●作者の思いを捉え、表現の特徴を生かしながら朗読しよう。

春に

たにかわ しゅんたろう
谷川 俊太郎

この気もちはなんだろう
目に見えないエネルギーの流れが
大地からあしのうらを伝わって
ぼくの腹へ胸へそうしてのどへ
声にならないさけびとなってこみあげる
この気もちはなんだろう
枝の先のふくらんだ新芽が心をつつく
よろこびだ しかしかなしみでもある
いらだちだ しかもやすらぎがある
あこがれだ そしていかりがかくれている
心のダムにせきとめられ
よどみ渦まきせめぎあい



作者 谷川俊太郎 一九三一（昭和六）—— 東京都出身。詩人。
著書 詩集「二十億光年の孤独」「六十二のソネット」
「地球へのピクニック」「定義」など。
出典 「どきん」

いまあふれようとする
この気もちはなんだろう
あの空のあの青に手をひたしたい
まだ会ったことのないすべての人と
会ってみたい話してみたい
あしたとあさってが一度にくるといい
ぼくはもどかしい
地平線のかなたへと歩きつづけたい
そのくせこの草の上でじっとしていたい
大声でだれかを呼びたい
そのくせひとり黙っていたい
この気もちはなんだろう

平野瑞恵・絵

【新出漢字】

16 渦 うず 渦潮



握手

井上ひさし

上野公園に古くからある西洋料理店へ、ルロイ修道士は時間どおりにやって来た。桜の花はもうどうに散って、葉桜にはまだ間があつて、そのうえ動物園はお休みで、店の中は気の毒になるぐらいすいている。椅子から立って手を振って居所を知らせると、ルロイ修道士は、「呼び出したりしてすみませんね。」

と達者な日本語で声をかけながら、こっちへ寄ってきた。ルロイ修道士が日本の土を踏んだのは第二次大戦直前の昭和十五年の春、それからずっと日本暮らしだから、彼の日本語には年季が入っている。

「今度故郷へ帰ることになりました。カナダの本部修道院で畑いじりでもしてのんびり暮らしましょう。さよならを言うために、こうして皆さんに会って回っているんですよ。しばらくでました。」

ルロイ修道士は大きな手を差し出してきた。その手を見て思わず顔をしかめたのは、光ヶ丘天使園の子供たちの間でささやかれていた「天使の十戒」を頭に浮かべたせいである。中学三年の秋から高校を卒業するまでの三年半、わたしはルロイ修道士が園長を務める児童養

- 目標**
- 登場人物の置かれた状況や言動に着目して、人物像を捉える。
 - 登場人物の生き方や考え方を捉え、人間や社会について自分の意見をもつ。

1 上野公園 東京都台東区にある、日本最初の公立公園。桜の名所で、園内には動物園や博物館などがある。

1 修道士 キリスト教の宗派の一つであるカトリックで、清貧・貞潔・服従の三つの誓いを立てて修行する人。

5 達者

7 年季が入る

(18ページ)

6 第二次大戦 一九三九年にヨーロッパで始まった第二次世界大戦のこと。日本は一九四一(昭和一六)年に参戦した。

12 天使の十戒 天使園で定められていた十か条の戒め。

13 児童養護施設 保護者のいない児童など、養護を必要とする者を入所させ、その生活を保障する施設。

8 気前がいい

7 漢洗濯場

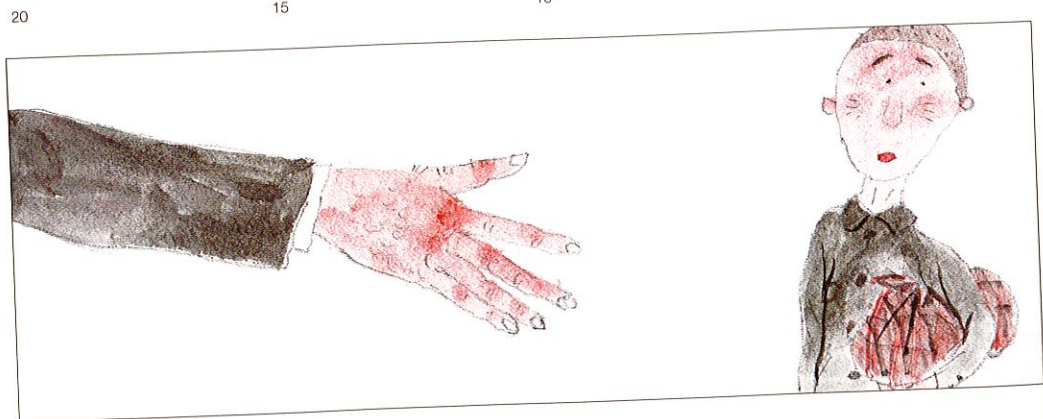
9 訓代物(しろもの)

護施設の厄介になっていたが、そこには幾つかの「べからず集」があった。子供の考え出したものであるから、べつにたいしたべからず集ではなく、「朝のうちに弁当を使うべからず。(見つかる)、次の日の弁当がもらえなくなるから)」、「朝晩の食事は静かに食うべからず。(ルロイ先生は、園児がにぎやかに食事をしているのを見るのが好きだから)」、「洗濯場の手伝いは断るべからず。(洗濯場主任のマイケル先生は気前がいいから、きつとバター付きパンをくれるぞ)」といった式の無邪気な代物で、その中に、「ルロイ先生とうっかり握手をすべからず。(二、三日鉛筆が握れなくなっても知らないよ)」というのがあったのを思い出して、それで少しばかり身構えたのだ。この「天使の十戒」が、さらにわたしの記憶の底から、天使園に収容されたときの光景を引っ張り出した。

風呂敷包みを抱えて園長室に入っていたわたしを、ルロイ修道士は机越しに握手で迎えて、

「ただいまから、ここがあなたの家です。もう、なんの心配もいりませんよ。」

と言ってくれたが、彼の握力は万力よりも強く、しかも腕を勢いよく上下させるものだから、こっちのひじが机の上



に立ててあった聖人伝にぶつかって、腕がしびれた。

だが、顔をしかめる必要はなかった。それは実に穏やかな握手だった。ルロイ修道士は病人の手でも握るようにそっと握手をした。それから、このケベック郊外の農場の五男坊は、東京で会った、かつての収容児童たちの近況を熱心に語り始めた。やがて注文した一品料理が運ばれてきた。ルロイ修道士の前にはプレーンオムレツが置かれた。

「おいしそうですね。」

ルロイ修道士はオムレツの皿をのぞき込むようにしながら、両のてのひらを擦り合わせる。だが、彼のてのひらはもうギチギチとは鳴らない。あの頃はよく鳴ったのに。園長でありながら、ルロイ修道士は訪問客との会見やデスクワークを避けていた。たいていは裏の畑や鶏舎にいて、子供たちの食料を作ることに精を出していた。そのために、彼の手はいつも汚れており、てのひらは櫛の板でも張ったように固かった。そこで、あの頃のルロイ修道士の汚

いてのひらは、擦り合わせるたびにギチギチと鳴ったものだった。

「先生の左の人さし指は、相変わらず不思議なかつこうをしていますね。」

フォークを持つ手の人さし指がぴんと伸びている。指の先の爪は潰れており、鼻くそを丸めたようなものがこびりついている。正常な爪はもう生えてこないのである。あの頃、ルロイ修道士の奇妙な爪について、天使園にはこんなうわさが流れていた。日本にやって来て二年もしないうちに戦争が始まり、ルロイ修道士たちは横浜から出帆する最後の交換船でカナダに帰ることになった。ところが日本側の都合で、交換船は出帆中止になってしまったのである。そして、連れていかれたところは丹沢の山の中。戦争が終わるまで、ルロイ修道士たちはここで荒地を開墾し、みかんと足柄茶を作らされた。そこまではいいのだが、カト

1 聖人伝 カトリック教会が「聖人」の称号を与えた人の伝記。この称号は、殉教者など特に信仰が深く、徳の高い人物に与えられた。

3 ケベック カナダ南東部の都市。

5 プレーンオムレツ 野菜や肉などを入れずに、溶いた卵だけをバターで焼いた料理。

17 交換船 交戦国が、互いに在留民や捕虜を交換するために派遣する船。

10 精を出す

16 奇妙

2 漢 穏やか

9 漢 鶏舎

14 漢 爪

20 漢 開墾

(20ページ)

19 丹沢 神奈川県北西部から、静岡・山梨両県の一部にまたがる丹沢山地のこと。

20 足柄茶 丹沢山地のある神奈川県足柄上郡などを産地とする茶。

(21ページ)

1 戒律 宗教上、人が守るべきものとして定められているおきて。

3 月月火水木金 元は戦前の海軍で使われていた言葉で、土曜も日曜も返上して訓練に励むという意味。戦時中に、勤労礼賛、勤務強制の言葉として一般に広まった。

14 国際法 国家間の合意に基づいて成立し、国家間の関係を規律する法。

1 漢 監督

3 漢 大日本帝国

8 漢 泥

せん。」

ルロイ修道士はナイフを皿の上に置いてから、右の人さし指をぴんと立てた。指の先は天井を指してぶるぶる細かく震えている。また思い出した。ルロイ修道士は、「こら。」とか、「よく聞きなさい。」とか言う代わりに、右の人さし指をぴんと立てるのが癖だった。

「総理大臣のようなことを言っ

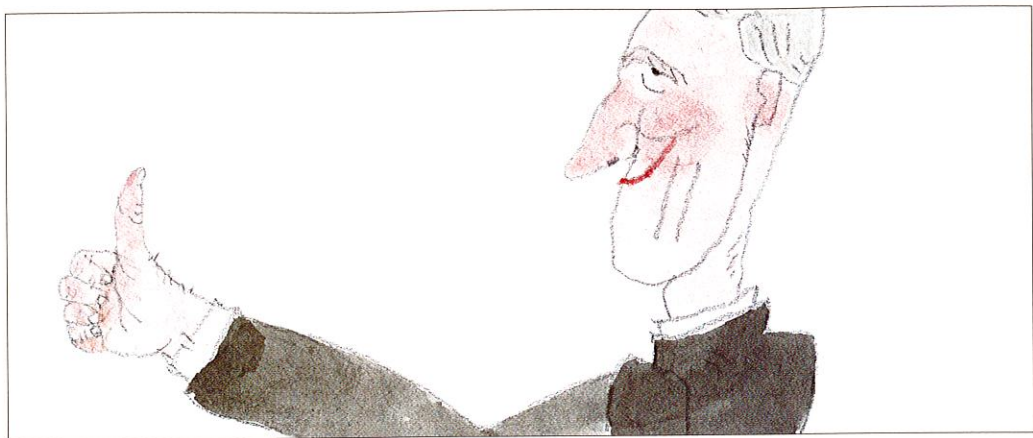
リック者は日曜日の労働を戒律で禁じられているので、ルロイ修道士が代表となって監督官に、「日曜日は休ませてほしい。その埋め合わせは、他の曜日にとする。」と申し入れた。

すると監督官は、「大日本帝国の七曜表は月月火水木金金。この国には土曜も日曜もありやせんのだ。」と叱りつけ、見せしめに、ルロイ修道士の左の人さし指を木づちで思い切りたたき潰したのだ。だから気をつける。ルロイ先生はいい人にはちがいないが、心の底では日本人を憎んでいる。いつかは爆発するぞ。……しかし、ルロイ先生はいつまでたっても優しかった。そればかりかルロイ先生は、戦勝国の白人であるにもかかわらず敗戦国の子供のために、泥だらけになって野菜を作り鶏を育てている。これはどういうことだろう。

「この子供をちゃんと育ててから、アメリカのサーカスに売らんのだ。だから、こんなに親切なんだぞ。あとでどっと元をとる気なんだ。」といううわさも立ったが、すぐ立ち消えになった。おひたしや汁の実になった野菜がわたしたちの口に入るところを、あんなにうれしそうに眺めているルロイ先生を、ほんの少しでも疑っては罰が当たる。みんながそう思い始めたからである。

「日本人は先生に対して、ずいぶんひどいことをしましたね。交換船の中止にしても国際法無視ですし、木づちで指をたたき潰すに至っては、もうなんて言っ

「総理大臣のようなことを言っ



たりするのは傲慢です。それに、日本人とかカナダ人とかアメリカ人といったようなものがあると信じてはなりません。一人一人の人間がいる、それだけのことですから。」

「わかりました。」

わたしは右の親指をぴんと立てた。これもルロイ修道士の癖で、彼は、「わかった。」「よし。」「最高だ。」と言う代わりに、右の親指をぴんと立てる。そのことも思い出したのだ。

「おいしいですね、このオムレツは。」

ルロイ修道士も右の親指を立てた。わたしは、はてなと心の中で首をかしげた。おいしいと言うわりには、ルロイ修道士に食欲がない。ラグビーのボールを押し潰したようなかっこうのプレーンオムレツは、空気を入れればそのままグラウンドに持ち出せそうである。ルロイ修道士はナイフとフォークを動かしているだけで、オムレツをちっとも口へ運んではいないのだ。

「それよりも、わたしはあなたをぶったりはしませんでしたか。あなたにひどい仕打ちをしませんでしたか、もし、していたなら、謝りたい。」

「一度だけ、ぶたれました。」

ルロイ修道士の、両手の人さし指をせわしく交差させ、打ちつけている姿が脳裏に浮かぶ。これは危険信号だった。この指の動きでルロイ修道士は、「おまえは悪い子だ。」とどなっているのだ。そして次には、きっと平手打ちが飛ぶ。ルロイ修道士の平手打ちは痛かった。

「やはりぶちましたか。」

ルロイ修道士は悲しそうな表情になって、ナプキンを折り畳む。食事はもうおしまいなのだろうか。

「でも、わたしたちは、ぶたれてあたりまえの、ひどいことをしてかしたんです。高校二年のクリスマスだったと思いますが、無断で大使園を抜け出して東京へ行ってしまったのです。」

翌朝、上野へ着いた。有楽町や浅草で映画と実演を見て回り、夜行列車で仙台に帰った。そして待っていたのがルロイ修道士の平手打ちだった。「あさつての朝、必ず戻ります。心配しないでください。捜さないでください。」という書き置きを、園長室の壁に貼りつけておいたのだが。

「ルロイ先生は一月間、わたしたちに口をきいてくれませんでした。平手打ちよりこっちのほうがこたえましたよ。」

「そんなこともありましたねえ。あのときの東京見物の費用は、どうやってひねり出したんですか。」

「それはあのとき白状しましたが……。」

「わたしは忘れてしまいました。もう一度教えてくれませんか。」

「準備に三か月はかかりました。先生からいただいた純毛の靴下だの、つなぎの下着だのを着ないでとっておき、駅前の闇市で売り払いました。鶏舎から鶏を五、六羽持ち出して、焼

5

10

15

20

9 有楽町や浅草 共に東京都内の地名。当時は、劇場や映画館などが並んでいた。

20 闇市 正規の販路や価格によらずに商品売買を行う市場。第二次世界大戦直後の混乱期に、日本各地で開かれていた。

11 ……(の)わりに

1 漢 傲慢

1 せわしい

14 こたえる意

11 漢 探す

20

15

10

5

き鳥屋に売ったりもしました。」

ルロイ修道士は改めて両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつける。ただしあの頃と違って、顔は笑っていた。

「先生はどこか悪いんですか。ちっとも召しあがりませんか。」

「少し疲れたのでしよう。これから仙台の修道院でゆっくり休みます。カナダへたつ頃は、前のような大食らいに戻っていますよ。」

「だったらいいのですが……。」

「仕事はうまくいっていますか。」

「まあまあといったところですよ。」

「よろしい。」

ルロイ修道士は右の親指を立てた。

「仕事があまくいかないときは、この言葉を思い出してください。『困難は分割せよ。』あせってはなりません。問題を細かく割って、一つ一つ地道に片づけていくのです。ルロイのこの言葉を忘れないでください。」

冗談じゃないぞ、と思った。これでは、遺言を聞くために会ったようなものではないか。

そういえば、さっきの握手もなんだか変だった。「それは実に穏やかな握手だった。ルロイ修道士は病人の手でも握るようにそっと握手をした。」というように感じたが、実はルロイ修道士が病人なのではないか。元園長は何かの病にかかり、この世のいとまごいに、こうやって、かつての園児を訪ねて歩いているのではないか。

「日本でお暮らしになっけていて、楽しかったことがあったとすれば、それはどんなことでしたか。」

たか。

先生は重い病気にかかっているのでしょう、そして、これはお別れの儀式なのです。ね。ときこうとしたが、さすがにそれははばかられ、結局は、平凡な質問をしてしまった。

「それはもう、こうやっているときに決まっています。天使園で育った子供が世の中へ出て、一人前の働きをしているのを見るときがいつとう楽しい。何よりもうれしい。そうそう、あなたは上川君を知っていますね。上川一雄君ですよ。」

もちろん知っている。ある春の朝、天使園の正門の前に捨てられていた子だ。捨て子は春になるとぐんと増える。陽気がいいから、発見されるまで長くかかっても風邪を引くことはない。あるまいという、母親たちの最後の愛情が春を選ばせるのだ。捨て子はたいてい姓名がわからない。そこで、中学生、高校生が知恵を絞って姓名をつける。だから、忘れるわけではないのである。

「あの子は今、市営バスの運転手をしています。それも、天使園の前を通っている路線の運転手なのです。そこで、月に一度か二度、駅から上川君の運転するバスに乗り合わせることもあるのですが、そのときは楽しいですよ。まずわたしが乗りますと、こんな合図をするんです。」

ルロイ修道士は右の親指をぴんと立てた。

「わたしの癖をからかっているんですね。そうして、わたしに運転の腕前を見てもらいたいのでしょうか、バスをぶんぶん飛ばします。最後に、バスを天使園の正門前に止めます。停留所じゃないのに止めてしまうんです。上川君はいけない運転手です。けれども、そういうときがわたしにはいつとう楽しいのですね。」

5

10

15

20

13 地道ジツダウ18 いとまごい意12 音分割オンカツ15 漢冗談カンジュタン15 音遺言オンイゴン

5

10

15

20

3 平凡ヘンバン17 腕前ウデノマエ腕が立つ
腕によりをかける
腕を振るう9 漢姓名カンセイメイ



「いっとう悲しいときは……？」

「天使園で育った子が世の中に出て結婚しますね。子供が生まれます。ところがそのうちに、夫婦の間がうまくいかなくなる。別居します。離婚します。やがて子供が重荷になる。そこで、天使園で育った子が、自分の子を、またはや天使園へ預けるために長い坂をとぼとぼ上ってやって来る。それを見るとときがいつとう悲しいですね。なにも、父子二代で天使園に入ることはないんです。」

ルロイ修道士は壁の時計を見上げて、

「汽車が待っています。」

と言いつつ、右の人さし指に中指をからめて掲げた。これは「幸運を祈る」「しっかりおやり」という意味の、ルロイ修道士の指言葉だった。

上野駅の中央改札口の前で、思い切ってきた。

「ルロイ先生、死ぬのは怖くありませんか。わたしは怖くてしかたがありませんが。」

かつて、わたしたちがいたずらを見つけたときにしたように、ルロイ修道士は少し赤くなつて頭をかいた。

「天国へ行くのですから、そう怖くはありませんよ。」

「天国か。本当に天国がありますか。」

「あると信じるほうが楽しいでしょうが。死ねば、何もなただむやみに寂しいところへ行くと思うよりも、にぎやかな天国へ行くと思うほうがよほど楽しい。そのために、この何十年間、神様を信じてきたのです。」

わかりましたと答える代わりに、わたしは右の親指を立て、それからルロイ修道士の手を

とって、しっかりと握った。それでも足りずに、腕を上下に激しく振った。「痛いですよ。」

ルロイ修道士は顔をしかめてみせた。

上野公園の葉桜が終わる頃、ルロイ修道士は仙台の修道院でなくなった。まもなく一周忌である。わたしちに会って回っていた頃のルロイ修道士は、身体中が悪い腫瘍の巣になっていたそう。葬式でそのことを聞いたとき、わたしは知らぬ間に、両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけていた。

村上豊・絵



作者 井上ひさし 一九三四（昭和九）—二〇一〇（平成二二）
山形県出身。小説家・劇作家。
著書 小説「ブンとファン」「四十一番の少年」、戯曲「父と暮せば」など。
出典 「ナイン」

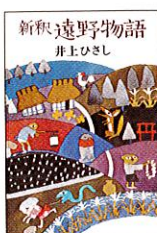
4 一周忌 ここでは、なくなって一年後の命日のこと。
4 漢 一周忌

広がる読書

「ブンとファン」井上ひさし



「新釈 遠野物語」井上ひさし



【新出漢字】

21 監 <small>カン</small>	21 濯 <small>タク</small>	20 穩 <small>オン</small> <small>おだやか</small>	20 鶏 <small>ケイ</small> <small>にわとり</small>	20 爪 <small>ツメ</small>	20 壘 <small>コン</small>
24 冗 <small>ジョウ</small>	21 督 <small>トク</small>	21 帝 <small>テイ</small>	21 泥 <small>デイ</small> <small>どろ</small>	22 傲 <small>ゴウ</small>	23 搜 <small>ソウ</small> <small>さがす</small>
冗長	家督	帝王	泥水	傲然	捜査
25 姓 <small>セイ</small> <small>シヨウ</small>	同姓	忌中 <small>キ</small> <small>いませ</small>			

【新出音訓】

19 代物（しろもの）	24 分割（ブンカツ）	24 遺言（ユイゴン）
-------------	-------------	-------------

目標

- 登場人物の置かれた状況や言動に着目して、人物像を捉える。
- 登場人物の生き方や考え方を捉え、人間や社会について自分の意見をもつ。



学習

「ルロイ修道士」の生き方について考え、作品を批評してみよう。

1 確認しよう

「現在」と「回想」の部分を読み分けながら、人物どうしの関係や置かれた状況を確認しよう。

2 読みを深めよう

- ① 次のような「ルロイ修道士」の言動から、人物像を捉えよう。
 ・「園長でありながら、ルロイ修道士は……子供たちの食料を作ることに精を出していた。」（20ページ8行目）
 ・「総理大臣のようなことを言っはけませんよ。……それだけのことですから。」（21ページ20行目）
 ・「上川君はいけない運転手です。けれども、……楽しいのですね。」（25ページ19行目）
- ② 「わたし」と「ルロイ修道士」との間で交わされた三回の握手に込められた二人の思いについて、話し合おう。

3 自分の考えをもとう

「ルロイ修道士」の人物像やその描かれ方などから、この作品のよさや特徴について、自分の考えを書いてみよう。

言葉を広げる

作品に使われている比喻表現を抜き出し、それがどのような効果をもたらしているか考えてみよう。

学習の窓

物語や小説を批評する

物語や小説を読んで、内容や描き方を根拠にして作品を評価することを「批評」という。批評するためには、人物の生き方や描かれ方、時代や社会背景、語り手の思いや考え方、語句の使い方や表現のしかたなどの観点を定め、作品の特徴、価値などを考えることが大切である。批評を交流することで、自分と友達の読み方やものの見方の違いなどを知ることができ、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

学習を振り返る

- どんな点に着目して「ルロイ修道士」の人物像を考えたか。
- 登場人物のどんな生き方や考え方が印象に残ったか。

漢字を確認しよう ・ は中学校で学習する音訓 290

新しく習った漢字

1 次の——線部の言葉を読もう。【漢字の読み】

- ① (ア)ギターを爪弾く。 (イ)慎重に爪を切る。
- ② (ア)山の麓で鶏を飼う。 (イ)鶏卵を出荷する。
- ③ (ア)彼は穏やかな人柄だ。 (イ)穏便に話し合う。

2 次の□に合う漢字をへゝから選ぼう。【同じ音読みの漢字】

- ① カン〈監・鑑〉 (ア) 賞 (イ) 視
- ② コン〈墾・懇〉 (ア) 開 (イ) 意
- ③ テツ〈徹・撤〉 (ア) 貫 (イ) 去
- ④ ニン〈任・妊〉 (ア) 娠 (イ) 務

3 次の——線部はへゝが部首の漢字である。【同じ部首の漢字】

- ① 〈心〉 忌避 悦楽
- ② 〈手〉 怠惰 休憩
- ③ 措置 捜査 拘束

新しく習う音訓

1 次の文に合う言葉をへゝから選ぼう。【同じ訓読みの漢字】

- ① 朝日にへ生える・映えるゝ花の姿。
- ② 夜が明けへ初める・染めるゝ。
- ③ 作家が自分のへ生い・負いゝ立ちを語る。
- ④ 大勢の人を見て、気へ遅れ・後れゝする。

30	措	ソ	挙措
30	拘	コウ	拘禁
30	憩	ケイ (いこい)	憩いの場
30	惰	ダ	懦弱
30	悦	エツ	満悦
30	娠	シン	妊娠
30	妊	ニン	懐妊
30	撤	テツ	撤回
30	徹	テツ	徹底
30	懇	コン (ねんご)	懇願
30	慎	ツシン つしむ	慎重

季節のしおり 春



「紅白梅図屏風」 尾形光琳



あなたが春を感じるの、どんなときだろうか。霞たなびく朧月を眺めたとき、梅の香りがしたとき、心地よい眠気に包まれたとき……
ここで紹介した作品から、春を感じ取ってみよう。

梅一輪一輪ほどの暖かさ

服部嵐雪

石走る垂水の上のさわらびの
萌え出づる春になりにつけるかも

志貴皇子

世の中に絶えて桜のなかりせば
春の心はのどけからまし

在原業平

春の季語
花冷え | はなびえ | 桜の咲く季節に寒さが戻り冷え込むこと。花便り、花吹雪など花の付く季語は多い。
水温む | みずぬるむ | 春になって、水が温かく感じられるようになること。「温む水」も同じ意。
鳥雲に入る | とりくもにいる | 春になって、北に帰る渡り鳥が雲に入っていくように見えること。